

アリストテレスにおけるウーシアアの優位性について

岩田 圭一

はじめに

アリストテレスにおけるウーシアア (*οὐσία*) の優位性は、「ウーシアア」の用法の多様さと、優位性を問題にする際の観点の多様さによってさまざまな仕方で説明されうる。本稿では、アリストテレスの形而上学的思考のうち、カテゴリーの学説を前提にした、質料形相論の観点に立っていない形而上学的思考に焦点をあて、ウーシアアの優位性について考察を行う。

カテゴリー学説の特徴は、ウーシアアが性質や量といった属性¹に対して優位に立っているという主張にある。例えば『形而上学』Z巻第1章では、個別的な人間などを念頭に置いて、ウーシアアが属性（および属性と基体との複合体）に対して第一のものであることが主張される (*Met. Z 1, 1028a20–31*)。その際、アリストテレスは、属性はその基体（ウーシアア）から離れてありえないが、ウーシアアのみは離れてありうるということ、ウーシアアの優位性の説明として示している (*a33–34, cf. a23–24*)。この説明によって理解されるウーシアアの優位性はいわゆる存在論的な優位性である。ウーシアアは属性なしにありうるが、属性はウーシアアなしにはありえない、という非対称性が、存在論的な優位性の特徴と理解されている²。この非対称性については、具体的な例を考えた場合、多

¹ 付帯的な属性と考えてよいが、『カテゴリー論』では付帯的な述語づけという考えが見られないので——ただし関係的なものの理解において主人に「人間である」などが付帯するという見方はある (*Cat. 7, 7a25–b9*)——、「付帯的」という限定をしていない。『トポス論』に見られるように、属性は基体との関係によっては固有性とみなされる場合がある（山口義久訳『トポス論』第1巻第9章、注(1)、p. 39を参照）。

² 多くの解釈者が認めるように、この優位性は『形而上学』Δ巻第11章(1019a2–6)で示される「自然ないしウーシアアにおいてより先」(自然的な優位性)に相当する。Fine (1984), pp. 35–38は『形而上学』Δ巻第11章におけるその一節と『エウデモス倫理学』第1巻第8章の一節を見ることによって、この優位性が、「～から離れてある」あるいは「～なしに存在しうる」という、「存在論的に離れてあること (ontological separation)」によって説明されることを明確にしている。『エウデモス倫理学』の一節でアリストテレスは、最高善に関する見解の検討に際してプラトンの善のアイデアを取り上げ、これが諸々の善いもののうちで第一のものであることについて以下の説明を与えている。「というのも、分有されるもの〔アイデア〕がなくなると同時に、アイデアを分有している側もなくなってしまう。分有している側は、かのアイデアを分けもつことで〔アイデアと同じ名で〕語られるのであり、「第一のもの」は「後に来るもの」に対して、こうした関係に立っている。それゆえ「善それ自体」とは善のアイデアのことなのである。実際またそれは分有している側から「離れて」実在している」(*EE I 8, 1217b11–15*) (荻野弘之訳『エウデモス倫理学』、p. 220)。Δ巻第11章では、プラトンが行っていた「より先」と「より後」の区別として、「そのもの〔より先のもの〕は他のもの〔より後のもの〕なしにあることが可能であるが、後者は前者なしにあることが可能ではない」(1019a3–4)と

くの問題があることが指摘されうるが³、さしあたりその問題には触れず、アリストテレスはテキストにおいて明確に非対称性を主張しているということを述べておくにとどめる。

この存在論的な優位性の主張は多くの著作で見られ、『カテゴリー論』でも主張されていると理解されている⁴。ただし、『カテゴリー論』の場合、ウーシアアの優位性は、他の著作の場合よりも注意が必要である。それは、「第一のウーシアア」と「第二のウーシアア」が区別されているからである。『カテゴリー論』で挙げられる例によれば、或る特定の人間 (*ὁ τις ἄνθρωπος*) (個別的な人間) は第一のウーシアアであり、人間 (種) や動物 (類) は第二のウーシアアである。先ほど見た『形而上学』やその他の著作では、属性に対して優位であるウーシアアは個物であると考えられる⁵。個物としてのウーシアアが属性と非対称的なあり方をしていることが説明され、個物としてのウーシアアの存在論的な優位性が主張されている。『カテゴリー論』の場合、種や類は第二のウーシアアとみなされているが、これは、第一のウーシアアが第二のウーシアアに対して存在論的に優位に立っていることを示しているように思われる。しかし存在論的な優位性が非対称性によって説明されることを考えると、第一のウーシアアの優位性を存在論的な優位性とみなすことは難しいように思われる。それが存在論的な優位性であるなら、第二のウーシアアは第一のウーシアアなしにはありえないが、第一のウーシアアは第二のウーシアアなしにありう

説明されている。つまり、イデアはこれを分有しているものなしにありうるが、後者は前者なしにはありえないということであり、これがイデアの存在論的な優位性ということになる。³ 例えば個別的な人間というウーシアアが色なしにありうるかという問題がある。その人間がたまたまもっている個別の色 (白いなど) については、確かにそれなしにその人間はありうるが、色のない人間は存在しない。Corkum (2008) は、存在論的な非依存性 (ontological independence) (存在論的な優位性) を成り立たせるために、非対称性を維持しながら、そうした問題を生じさせないような解釈を提出している。彼は、存在論的な優位性を説明する離在性ないし離在可能性を、存在論的な優位性の理解から締め出す。アリストテレスがテキストで離在性ないし離在可能性によって存在論的な優位性を説明していることは確かなのであるが、この説明は問題を生じさせる。そこで Corkum は、狭い意味での述語づけと内属性の基体であるということにのみ、存在論的な優位性を説明する役割を認める。これはよく考えられた解釈であるが、非対称性が独特な仕方でも説明される点が気にかかる。

⁴ 第一のウーシアアと他のものとの間に非対称性があるという意味においてである。Corkum (2008) も Peramatzis (2011), Ch. 11 (pp. 229–253) も『カテゴリー論』において存在論的な優位性が主張されていると考えるが、彼らは非対称性について、一般的な理解 (「～なしにありうる」、「離れてありうる」という離在可能性による理解) とは異なる理解を提示している。Corkum については前注で触れた。Peramatzis は「～なしにありうる」を「(そのものが) ～なしに、それがそれであるところのものである」と解することによって本質主義的な理解を提示している。Cf. Peramatzis (2011), Chs. 8–11. 第一のウーシアア以外のものがそれぞれ一定の種類のものであるのは第一のウーシアアのおかげであるが、第一のウーシアアがそれぞれ一定の種類のものであることは他のものによっているのではない、という仕方でも非対称性が理解される。

⁵ 『自然学』第 1 巻第 2 章でも、属性がウーシアアから離れてありうるものではないことが示されている (*Ph.* I 2, 185a31)。その一節 (a20–32) では、万物を一つとする説が批判される文脈において、万物がどのカテゴリーのものであるかが問題にされている。属性に対して優位なものであるウーシアアを個物として示しているわけではないが、その一節において、万物は一個の人間であるのかといった仕方でも批判がされている部分があり、個物としてのウーシアアが念頭に置かれていることを読み取ることも可能である。

る、という非対称性があるはずである。しかし人間という種なしに或る特定の人間が存在すると言えるかどうかは問題である。『カテゴリー論』においてアリストテレスは個物を「或る特定の人間」というように種の名を用いて表している。これは、そのものが種的に何であるかがわからないような個物をアリストテレスが想定していないことを示している。そうであるなら、第一のウーシアーは第二のウーシアーなしにありうるとは言えないように思われる⁶。

ところで『カテゴリー論』については、真作か偽作かという問題が古くからあり、またその問題との連関においてこの著作の内容の一貫性や意義をどのように評価するかという問題がある⁷。筆者の印象では、最近の理解には二つの方向性があるように思われる。一つは、M・フレーデの論文によって脚光を浴びるようになった『トポス論序説』という理解に基づいて『カテゴリー論』の論述の意義を考え直すという方向性、もう一つは、個別的なウーシアーを第一のものとする存在論的な優位性が主張される著作という伝統的な理解を踏まえつつ、存在論的な優位性の概念を彫琢するという方向性である⁸。前者はロドスのアンドロニコスが意図したのとは異なる仕方で『カテゴリー論』のテキストの意義を捉えようとするものである。後者は、『カテゴリー論』全体に関する研究ではないが、『カテゴリー論』においては実在の構造や存在するもの同士の優劣の関係が問題にされているという伝統的な理解に立った上で、非対称性による存在論的な優位性について独自の解釈を提示している。この解釈によって存在論的な優位性は論理的に不備のない主張に生まれ変わっているようにも見えるが、それが本当にアリストテレスの考えていたことなのかどうか、検討の余地がある。

⁶ これについては本稿の2において取り上げる。

⁷ これらの問題については Frede (1983), pp. 1-29 を参照。『カテゴリー論』は三つの部分からなり、とくに第9章までと第10章以降との論述のつながりのなさが問題となる。Frede はヘレニズム期に遡って『トポス論序説』というタイトルのほうがよいと考え、この著作のもとになった完全な著作を想定し、それが部分的に今の形で残っていると考える。第10章以降の論述の位置づけのためには有益な解釈であるが、その想定を受け入れてよいかどうかは検討の余地がある。20世紀からの研究動向として『カテゴリー論』の真正性は一般に認められているが、真正性を疑う研究者も存在する。これについては、『カテゴリー論』と『トポス論』との関係性から真正性を主張する I. Husik の議論を批判的に検討した Ushida (2003) を参照。

⁸ Frede の論文については前注で言及した。この論文を踏まえた方向性の研究として Menn (1995), pp. 311-337 がある。Menn は『カテゴリー論』を第一哲学に属するとも哲学であるとも考えないので、『カテゴリー論』と『形而上学』とを比較検討することは有意義なことではないことになる。中畑正志訳『カテゴリー論』の解説もこの方向性の見解を提示している (pp. 282-286)。ただし、『カテゴリー論』において存在論が提示されていることにも留意している (pp. 286-288)。後者の方向性については注3と注4を参照。この方向性が踏まえる伝統的な理解においては、例えば Höffe (1996), pp. 164-177 のように、『カテゴリー論』の存在論 (Ontologie) と『形而上学』のそれは比較検討される。松永雄二訳『カテゴリーアイ』の解説でも、「『範疇論』の主題は一貫して、「存在するもの」のあり方にかかわるのであり、従ってそれはいわば本質的な意味で、アリストテレスの全存在論の基礎を形づくっている」(p. 167)とされている。『カテゴリー論』と『形而上学』との比較検討によって形而上学ないし存在論について理解を深めようとする研究者は多い。Cf. Furth (1988), Loux (1991), Lewis (1991), Wedin (2000), 今井 (2011), Peramatzis (2011)。

筆者は後者の方向性に関心を向けているが、本稿では、『カテゴリー論』における第一のウーシアアの優位性の理解にあたって非対称性に固執せず、その優位性の主張を控え目な仕方でも理解することを考えている。そしてそこでの第一のウーシアアの優位性の主張にどのような意義があるのかを明らかにすることにしたい。その上で、アリストテレスが考えていた第一のウーシアアの含蓄について、『形而上学』などに見られる自体的な述語づけを手がかりに考察を行う。以下では、優位性の主張を取り上げる前に、まず、『カテゴリー論』における「ウーシアア」について一定の理解を提示しておくことにする⁹。

1 カテゴリーの一つとしてのウーシアアと基体としてのウーシアア

「ウーシアア」はカテゴリーの区分において用いられる概念であり、『カテゴリー論』第4章における区分と対応する『トポス論』第1巻第9章や『形而上学』Z巻第1章における区分では、「何であるか (*τί ἐστι*)」、あるいはその答えとしての「或るこれ (*τὸδε τι*)」¹⁰として説明される (*Top.* I 9, 103b22, *Met.* Z 1, 1028a11–12)。端的に「本質」と言ってもよいが、性質や量といった属性についても本質が問われうるので (*Top.* I 9, 103b27–37)、カテゴリーの中の第一のものとしての限りにおける本質とでも言うことができるだろう。しかしカテゴリー学説には、カテゴリーの区分に加えて、この区分を前提にした実在理解の提示という側面もある。この側面を考慮に入れ、そこで挙げられる個々の例に基づいて考えると、「ウーシアア」を「本質」と訳すことに戸惑いが感じられるようになる。

アリストテレスは『カテゴリー論』第2章において、狭い意味での述語づけと、内属性とによって、〈ある〉もの (*τὰ ὄντα*) の四分類を行っている。狭い意味での述語づけとは、同一カテゴリー内部の類種構造において成立する述語づけのことである。カテゴリーの区分にのみ注意を向ける場合、アリストテレスの「カテゴリーア」の意味合いから考えて、述語の部分のみに注意が向く可能性があり、アリストテレスはカテゴリーの区分において何か言語表現上の区分を行っているのだと理解されるおそれがある。しかし言語表現上の

⁹ 周知のように、新版アリストテレス全集では、「ウーシアア」の訳語として基本的に「本質存在」という訳語が用いられている。「本質存在」という表現は加藤 (1996), p. 204 において「実体 (または本質存在)」という仕方でも用いられている。「本質存在」という訳語は『カテゴリー論』における「ウーシアア」理解として正しい面がある一方で、アリストテレスがその語に新たに込めようとした意味合いを捉えにくくする可能性もある。「ウーシアア」の意味合いについては中畑訳『カテゴリー論』の補注 (pp. 95–98) を参照。本稿の1において関連テキストを確認した後、さしあたり「実体」という伝統的な訳語を採用する。その際、その語のもともとの意味合いが「何であるか」であることに注意を向ける必要がある。実際のところ、「ウーシアア」に一つの訳語を与えることは困難であり、新版全集でも、文脈に応じて「実在」(山口義久訳『トポス論』)、「実体」(高橋久一郎訳『分析論後書』)、「基本存在」(内山勝利訳『自然学』)といった訳語が与えられている。また、納富 (2021), pp. 552–565 は「実有」という訳語を採用している。

¹⁰ ただし「或るこれ」には、第一のウーシアアにとりわけ適用される用法もある (*Cat.* 5, 3b10–13)。これについては別の機会に論じる。

区分よりも、その基礎にある実在の区分に関心が向けられていることを理解する必要がある¹¹。そしてこの理解を促すのが〈ある〉ものの四分類である。この四分類では、〈基にある〉もの (*ὑποκείμενον*) (基体) について言われる (述語づけられる) ものと基体、あるいは、基体のうちにあるものと基体とが区別され、述語の部分によって示されるものと、その基体とが明確に区別される。基体の存在は、述語部分に着目して区別されたカテゴリーが適用されることによって理解される。例えば或る特定の間人について人間や動物が述語づけられるが、基体に述語づけられるもの (人間や動物) がウーシアーとみなされるだけでなく、基体としての或る特定の間人もウーシアーとみなされる。人間という種は動物が述語づけられる基体ともみなされうるが、基体としての人間ももちろんウーシアーである。

ここで、基体がウーシアーとされていることについて、カテゴリーの区分における「ウーシアー」——述語の位置にあるものを示す——が、当該の述語づけの基体にも適用されているのだと考えることができるかもしれない。つまり、「ウーシアー」は本来的には「何であるか」であるが、これが述語づけられる基体も、「何であるか」の答えにあたる名で捉えられることから、ウーシアーとみなされるのだと考えることができるかもしれない。実際、アリストテレスは『カテゴリー論』において、人間や動物が述語づけられる基体としての個別的なものを「或る特定の間人」と呼んでいる。「何であるか」としての「ウーシアー」から、個別的なものがいわば派生的にウーシアーとみなされるのだとすれば、個別的なものは、「何であるか」として捉えられる限りのものであると言えるだろう。しかし『カテゴリー論』第5章の論述を見ると、「ウーシアー」という語がとりわけあてはまるのは個別的なものであると主張されている。

最も重要な意味において、第一義的に、とりわけ (*κυριώτατά τε καὶ πρώτως καὶ μάλιστα*) ウーシアーと言われるのは、或る〈基にある〉ものについて言われることも、或る〈基にある〉ものうちにあることもないものであり、例えば或る特定の間人や或る特定の馬がそうである。(Cat. 5, 2a11–14)

第一のウーシアーは、他のすべてのものの基にあることによって、また、他のすべてのものがそれら〔第一のウーシアー〕について述語づけられるか、あるいはそれらうちにあることによって、とりわけウーシアーと言われる。(Cat. 5, 2b15–17) ([]は筆者による補足)

第一のウーシアーは、他のすべてのものの基にあることによって、最も重要な意味においてウーシアーと言われる。(Cat. 5, 2b37–3a1)

¹¹ 現代では一般的な理解になっている。Cf. Ackrill (1963), p. 71.

或る特定の人間といった個別的なものが第一義的にウーシアーと言われるということは、アリストテレスの立場としては、「何であるか」を「ウーシアー」の第一義的な用法とはみなしていないということだと考えられる¹²。その語自体の意味合いからすれば、「何であるか」が第一義的と考えたほうがよいと思われるが、アリストテレスは『カテゴリー論』において、そのような意味合いに代えて、自身はその語に込めたい意味合いを新たに提示しているのだと言えることができるだろう。実際、『カテゴリー論』第5章には、基体という意味合いで「ウーシアー」が用いられる場合が多く見られる。上に挙げた三箇所はもちろんのこと、第二のウーシアーについて説明が行われる際も、基体という意味合いが強調されている箇所がある。

第二のウーシアーについての説明としては、種と類を比べて種のほうがよりウーシアーであることを主張する説明がある。種や類が問題になっているので、第一のウーシアーの何であるかを説明する役割にまずは注意が向けられるが (*Cat.* 5, 2b7–14)、ともかくアリストテレスは第一のウーシアーがとりわけウーシアーであることを主張した後で、次のように述べている。

第一のウーシアーが他のものに対して関係しているのと同じように、種も類に対して関係している。というのも種は類の基にあるからである。なぜなら類は種について述語づけられるが、種は類について換位的に〔述語づけられ〕(*ἀντιστρέφει*) ないからである。したがってこれらのことから、種は類よりもよりウーシアーであることになる。 (*Cat.* 5, 2b17–22)

ここでは、種が類よりもウーシアーであることを説明するために、種が類にとっての基体であることに言及されている。第一のウーシアーが他のものにとっての基体であることと、種が類にとっての基体であることとの間に親近性を見出して、種が類よりもよりウーシアーであると説明されている。この場合、類がウーシアーとされることについては、基体性の点からの説明は行われていない。しかしアリストテレスは以下の説明も行っている。

第一のウーシアーが他のすべてのものに対して関係しているのと同じように、第一のウーシアーの種と類は残りのすべてのものに対して関係している。というのは、残りのすべてのものはそれら〔種と類〕について述語づけられるからである。実際、君は或る特定の人間を文法知識のあるものと言ひ、それゆえ、人間も動物も文法知識のあるものと言うだろうからである。そして他のものの場合も同様である。 (*Cat.* 5,

¹²『形而上学』Δ巻第8章において「ウーシアー」の最初の用法として挙げられるのは、物的なものを典型例とする基体としての用法である。またΖ巻第2章でも、ウーシアーと考えられるものとして物的なものが最初に挙げられている。

3a1-6)

この箇所では、第一のウーシアーが他のものにとっての基体であることと、種と類が他のもの（属性）にとっての基体であることとの間に親近性が見出されている。この親近性から、類もウーシアーであることが語られていけばよいのであるが、アリストテレスはその点を明確に語っていない。しかしアリストテレスが種と類を属性の基体とみなしていることははっきりしている。「述語づけ」が狭い意味での述語づけではなく、内属性も意味しうる述語づけになっている点に注意が必要であるが、ともかく種と類がともに基体であることが明示されている。アリストテレスは先の引用で、種が類よりもよりウーシアーであることを主張していたが、この「よりウーシアーである」という程度を表す表現は、類も、個物や種よりは低い程度ではあるがウーシアーであるということを示している。このことを踏まえれば、上の引用において、基体としての類のウーシアー性が示されていると理解することができるだろう。

以上から、「ウーシアー」によってアリストテレスが言い表したい意味合いは基体という意味合いであることが読み取れるが、基体というのは、狭い意味での述語づけと内属性の基体であるということであって、それ以上の意味を読み込むことは難しいように思われる。そのような「基体」に近い言葉が「ウーシアー」の訳語として採用されるのが望ましいが、本稿ではさしあたり、伝統的な訳語である「実体」を採用することにする。もちろんこの訳語は、何か物的なもの想起させたり、哲学の歴史を踏まえれば、物質的であれ非物質的であれ独立自存するものを意味するという先入観を与えたりするので、問題ではある。しかし「実体」という訳語自体が多様に理解されることが浸透していると信じて、以下では、「基体」の意味合いとのつながりで、伝統的な訳語を用いることにする。次に、本題である実体の優位性の問題に向かう。

2 『カテゴリー論』における実体の優位性

最初に触れたように、『カテゴリー論』における実体の優位性については、属性に対する優位性に加えて、第二の実体に対する第一の実体の優位性も主張されており、非対称性に基づく存在論的な優位性を『カテゴリー論』における優位性の主張に読み込んでよいかどうか問題となる。第一の実体と第二の実体との関係について、テキストに即して考察することにしたい。第一の実体の優位性は以下のように示されている。

他のすべてのものは、〈基にある〉ものとしての第一の諸実体について言われるか、あるいは〈基にある〉ものとしてのそれら〔第一の諸実体〕のうちにある。それゆえ、

もし第一の諸実体が存在しないとすれば、他のもののいずれかのものが存在することは不可能であることになる。というのは、他のすべてのものは、〈基にある〉ものとしてのそれら〔第一の諸実体〕について言われるか、あるいは〈基にある〉ものとしてのそれら〔第一の諸実体〕のうちにあるからである。(Cat. 5, 2b3–6)

第一の実体が狭い意味での述語づけと内属性の究極的な基体であることから、第一の実体がなければ、第二の実体も属性も存在しえないということが主張されている。ここでアリストテレスは第一の実体の何らかの優位性を主張しているが、非対称性に基づく存在論的な優位性を主張していると言い切るのは難しい。なぜなら、第一の実体が他のものなしにありうるとは言われていないからである。ここで、他の著作における属性に対する実体の存在論的な優位性の主張¹³を補って上の引用を理解し、非対称性を読み込むという方法もあるだろう。仮にこの方法をとるとすれば、他の著作において個物としての実体と属性との関係について非対称性が言われていることからして、第一の実体と属性との間に非対称性を読み込むことはできるように思われる¹⁴。しかし「他のもの」のもう一方、すなわち、第二の実体に対して非対称性を読み込むことができるだろうか。第二の実体なしに第一の実体がありうるということは言われていないし、他の著作でも種や類なしに個物がありうるとは言われていないように思われる。それどころか、『カテゴリー論』には、第一の実体が第二の実体なしにはありえないと思わせるようなテキストがある。それは以下のとおりである。

第二の諸実体のうちでは種が類よりもより実体である。なぜならそれ〔種〕は第一の実体により近いからである。というのは、もし人が第一の実体について何であるか(τί ἐστι)を示すとすれば、類よりも種を示すことによって、〔その何であるかを〕より知られるもの(γνωριμώτερον)として、そしてより固有なもの(οἰκείότερον)として示すことになるからである。例えば或る特定の人間について、動物よりも人間を示すことによって、より知られるものとして示すことになる。というのも、一方〔人

¹³ 『形而上学』 Z 卷第 1 章において、属性に対する実体の存在論的な優位性が主張されている。属性が実体から離れてありえないことが示されている他の箇所としては——実体が属性から離れてありうるとは言われていないが——、カテゴリー学説によってエレア派を批判する『自然学』第 1 卷第 2 章の一節(185a20–32)や、〈ある〉ものを宇宙論的な観点からカテゴリー学説によって説明する『形而上学』 A 卷第 1 章のはじめの部分(1069a18–22)などがある。これらの箇所でも、実体が属性から離れてありうると考えられているとすれば、存在論的な優位性が主張されていることになる。

¹⁴ 『カテゴリー論』第 2 章における〈ある〉ものの四分類において、属性が「基体のうちにある」ことの説明として、部分として基体のうちにあるのではないが、当の基体から離れてありえないものであるということが言われている(1a24–25)。前注で見たテキストも考え合わせることで、属性に対する第一の実体の存在論的な優位性を主張できるように思われる。今井(2011), p. 8 は、第一の実体が属性から離れてありうるものであることが『カテゴリー論』においてすでに言われていたと考えている。

間]は或る特定の人間により固有なものであるが、他方〔動物〕はより共通なものであるからである。(Cat. 5, 2b7-13)

もっともなことであるが、第一の諸実体の次には、他のもののうち、諸々の種と類のみが第二の実体と言われる。というのは、述語づけられるもののうちでこれらのみが第一の実体を明らかにするからである。というのは、もし人が或る特定の人間について何であるかを示すとすれば、種あるいは類を示すことによって、〔その何であるかを〕固有な仕方で (οικείως) 示すことになるからである。そして人は、動物よりも人間を示すことによって、〔或る特定の人間を〕より知られるものとするだろう。しかし、人が示すことができる他のもののいずれか、例えば白い、あるいは走る、あるいはそのような何であれを示すことによって、人は〔或る特定の人間を〕固有ではない仕方で (ἀλλοτριώς) 示したことになるだろう。したがって、他のもののうち、それら〔諸々の種と類〕のみが実体と言われるのがもっともなことである。(Cat. 5, 2b29-37)

これらの箇所では、第二の実体のうちで、種のほうが類よりも第一の実体に近いことが示されるが、その際に、種は第一の実体の何であるかを「より知られるもの」、「より固有なもの」として示すと言われている。また、第一の実体をその属性によって示すことは「固有ではない仕方」で示すこととされている。同じ実体のカテゴリーにおける種や類によって示すことは固有な仕方ですることであるが、種のほうが第一の実体の種類をより狭い範囲で特定するので、より固有なものとして示すことになる。

ここで注意したいのは、第一の実体をより固有なものとして示す種の名が、第一の実体そのものの把握においても使用されていることである。第一の実体に種を述語づけることは第一の実体をより固有な仕方ですることであると説明されているが、第一の実体がもともと種の名で把握されるものであることを考えれば、その説明はよく理解できる。もともと種の名で把握されると言ったが、このことは、種の存在が暗に前提されていることを示している。第一の実体に種を述語づける述語づけは、第一の実体と種との区別、それらのあり方の違いを示すが、第一の実体が種の名で把握されていることは、第一の実体と種との区別ではなく、それらが本来切り離せないものであることを示しているように思われる。人間であるなら動物でもあるので、人間という種から切り離されないものは動物という類からも切り離されないことになる。このように考えると、第一の実体は第二の実体なしにはありえないことになり、第二の実体に対する存在論的な優位性を第一の実体に認めることは難しくなるだろう。実際、或る特定の人間から「人間である」ことを剥ぎ取って、そのものを「或る特定の人間」として捉えることは奇妙なことである。第二の実体がなければ第一の実体は存在しないとは述べられていないが、上の引用の説明を見る限り、第二の

実体なしの第一の実体という存在を想定することは難しいと考えられる¹⁵。

先ほど (2b3-6 の引用の後で) 触れたように、第一の実体と属性との非対称性による第一の実体の存在論的な優位性については、他の著作を持ち出すことによって主張できるように思われる。アリストテレスは『カテゴリー論』第 5 章 (2b3-6) において、第一の実体が他のものに対して優位に立っていると主張しており、第二の実体と属性を分けて考えずにひっくるめて、これらに対する第一の実体の優位性を主張している。いま、第二の実体に対する存在論的な優位性という理解が困難であることを見たが、そうであるなら、第二の実体といっしょにされて、第一の実体よりも後のものとされている属性に関しても、属性に対する第一の実体の優位性を存在論的な優位性とはしないほうが自然であるように思われる。『カテゴリー論』では、第一の実体が属性なしにありうるとは言われていない。他の著作で言われているとは言っても、それは質料形相論など自然学的な考察も入っているテキストであり、簡単に支持のテキストとみなすことは問題である。属性に対する第一の実体の優位性についても、存在論的な優位性とは解さず、第二の実体に対する第一の実体の優位性の場合と同じ優位性と理解するのが自然だろう。

では、他のものに対する第一の実体の優位性とはいかなる優位性であるのか。アリストテレスは『カテゴリー論』において、狭い意味での述語づけと内属性によって〈ある〉も

¹⁵ 第一の実体の含みや、それが例えば「或る特定の人間」として捉えられているという事態については、井上忠氏の研究によって深い考察が行われている。例えば井上 (1988) の「存在と知識への序章」(pp. 3-23) では、「述べの地平」に対する「事実地平」、「現場」、「実在地平」、「個体実体の地平」という観点から、「個体実体を成立させる掴みの言葉」、「基底種」、「 γ 個体」、「先言措定」といった豊かな表現によって考察が行われている。ここでその哲学について論じることはできないが、第一の実体の理解にとって示唆的であるので、部分的に引用しておく。

実際の生活現場では、基底種語はなによりもまず掴みの言葉として、個体化の γ 言語として機能し、現場のそれぞれの個体を了解して現場そのものを成立させている。「これ」とか「この」とかの指示はこの γ 個体の現場了解の上にはじめて効いてくるのであり、述べはさらにこうして指示された対象について登場してくるわけである。つまり掴みの言葉は指示・記述という述べ地平の言語機能に先立って、それらのための先行条件を措定しているのであり、いわば述べ言葉にとっての先言措定 (*ὑποκείμενον*) である。(p. 18) /かれはこのような掴みの言語機能こそが生活現場にあってわれわれに物があるとして実在を把握させているのであり、掴みの解明が存在論の第一歩である、と指摘する。(pp. 18-19)

この存在論の核心として『形而上学』の本質論への言及が行われる。本稿では、『カテゴリー論』における第一の実体の含蓄を第二の実体との切り離しがたさの点から捉えているが、井上哲学においては〈種〉の導入によって、第一の実体が問題にされる地平が語り出される。「先言措定」や「〈種〉」などによってどのようなことがどのような仕方と問題にされているかについては、山本 (2016) の一 (pp. 8-12) が指南となる。井上哲学の独自性を分析哲学の諸理論の検討を通じて明らかにした論考として山本 (1976) がある。また、「〈種〉」に的を絞って『形而上学』中心巻における個体形相論との関係で考察を行った論考として高橋 (1991) がある。また、渡辺 (2012) は『形而上学』中心巻における形相が〈種〉であるという理解のもと、「第一のウーシアー」が自体的本質、内在形相として示される過程を確認し、H 巻第 6 章における一性の問題を論じている (pp. 257-281)。

の四分類を行っており、その存在論の項目を明確にしている。カテゴリーの区分を踏まえれば、実体の個物と普遍、属性の個物と普遍という四つが存在することになるが、後の論述において属性の個物と普遍との区別はそれほど問題になっていないので¹⁶、便宜上区別しないことにする。そうすると、実体の個物、その普遍、属性という三種類のものが考えられていることになるが、アリストテレスは狭い意味での述語づけと内属性に相当な信頼を置き、その究極的な基体となる実体の個物に「第一の実体」という称号を与える。そして実体の普遍は、第一の実体と同じように、内属性の基体となることから、「実体」の呼び名を与えられ、「第二の実体」と呼ばれていた。実体に内属する属性は、実体よりも後のものということになるだろう。アリストテレスはこれら三種類のものを順位づけして、第一の実体を第一位に置いている。それら相互が互いから離れてありうるかどうかについては、属性が基体としての実体から離れてありえないことが示されるのみで、実体が属性から離れてありうることも、第一の実体が第二の実体から離れてありうることも言われていない。つまり、非対称性は示されていない。したがって、存在論的な優位性はここでは主張されていないと解するのが自然な解釈であると言える。ここでは、基体であることが優位なことであるという前提のもとで、狭い意味での述語づけと内属性の究極的な基体として、第一の実体が優位なものとなみなされている。優位性の主張としては存在論的な優位性ほど強いものではなく、せいぜい、具体的な個物から成り立っている世界があるということを示すような意味合いがある程度である。つまり、優位性についての洗練された見解——非対称性に基づく存在論的な優位性の主張——は提示されていないのであって、単に一つの世界観が提示されているということである。

『カテゴリー論』におけるアリストテレスは、実在の構造における優劣については、いわば控え目な主張を行っていると考えられる。第一の実体と第二の実体との区別は狭い意味での述語づけの関係の結果であり、区別はされるが、区別されたそれら相互の存在論的な関係について踏み込んだ考察は行われていない。これは『カテゴリー論』における形而上学的思考の限界とも言えるだろう。『カテゴリー論』ではやはり言語と実在とのかかわりのほうに意識が向いており、実在の構造に深く立ち入った考察——この場合も言語を用いて考察されるが——は行われていないということだろう。

しかしながら、事物の世界がただあるということを表明することは、言語を用いて世界を理解する上では意味のあることである。それが示されているのが『カテゴリー論』第12章の一節である。アリストテレスは「より先 (*πρότερον*)」の四つの用法を示した後、追加で以下の用法を示している。

あることの随伴に関して換位される諸々のもののうち (*τῶν ... ἀντιστροφόντων κατὰ τὴν τοῦ εἶναι ἀκολουθήσων*)、何らかの仕方において他方のものにとってあること〔他方

¹⁶ 第5章の一節(4a10-22)において属性の個物への言及がある。

のものが「ある」と言われること]の原因となっているものはもちろん、自然において (φύσει) 「より先」と言われうるだろう。そしてそのような何らかのもの [事例] があることは明らかである。実際、人間があること (τὸ ... εἶναι ἄνθρωπον) は、それについての真なる言明に対して (πρὸς τὸν ἀληθῆ περὶ αὐτοῦ λόγον)、あることの随伴に関して換位される。というのは、もし人間があるなら、「人間がある」とわれわれが言う言明は真であり、また、それは換位されるからである。実際、「人間がある」とわれわれが言う言明が真であるなら、人間はある。しかし真なる言明が、事物 (τὸ πρᾶγμα) があることの原因では決してないのに対して、事物のほうは何らかの仕方において、言明が真であることの原因であるように見える。なぜなら、事物がある、あるいはないことによって、[それがあることについての] 言明は真、あるいは偽と言われるからである。(Cat. 12, 14b11–22)

自然において「より先」という表現は、他の著作では存在論的な優位性を示すのに用いられるが¹⁷、ここでの用法はそれとは異なるものである。事物が存在することが原因となって、それを説明する言明は真となる。換位されると言われているので、一定の存在言明が真であるなら、それが表しているものが存在するということでもある。このように換位はされるが、換位される両項 (事物の存在と真なる存在言明) には優劣の関係があり、事物の存在のほうは自然においてより先とみなされている。これはまさに、事物の世界はもとともあるのだという主張にほかならない¹⁸。

事物の世界が事実あることは、アリストテレスの形而上学的思考が深まった段階でも言及されることである。アリストテレスは『形而上学』Z巻第17章において、「何ゆえ」という問いによって存在の原因の探究を行うが、事物があるということ (τὸ ὄτι καὶ τὸ εἶναι) は明白なことであるとして、何ゆえそのものが当のものであるのかと問う必要がないことを明らかにしている (Met. Z 17, 1041a14–22)。アリストテレスにとって、事物の世界があることはその形而上学的思考の遂行において前提となることである。『カテゴリー論』はこの前提を語る著作であり、自然学的な諸概念なしの形而上学的思考によってこの世界の存在のあり方を説明した著作であると言えるだろう。

3 自体的な述語づけへの展開

最後に、『カテゴリー論』における「第一の実体」の含蓄について、他の著作に見られ

¹⁷ 注2でも触れたが、『形而上学』Δ巻第11章の一節(1019a2–6)において、「自然ないしウーシアーにおいてより先」という表現によって存在論的な優位性が示されている (cf. Met. M 2, 1077b2–3)。この場合の「ウーシアー」の訳語は「実在」や「存在」がよいだろう。

¹⁸ 筆者は、第一の実体の優位性をこの箇所「自然においてより先」と解することを提案しているのではない。この「より先」は真なる言明との関係で言われる優位性である。

る自体的な述語づけの点から考えてみたい。自体的な述語づけは付帯的な述語づけとの対比で理解され、本質的な述語づけと異なるものではないとも考えられている¹⁹。しかし『形而上学』Z巻第4-6章における本質論を見ると、自体的な述語づけが、その基体に対して異なるものを述語づける述語づけではなく、それ自体を述語づける述語づけであることが理解される。以下では、このような自体的な述語づけによって「第一の実体」の含蓄が理解されることを確認する。

『形而上学』Z巻第4章冒頭における自体的な述語づけを見る前に、実体と属性が自体的にあるものと付帯的にあるものとして説明される『分析論後書』第1巻第4章の一節(An. Post. I 4, 73b5-10)を見ておく。ここでは、「自体的」のいくつかの用法が区別されているが、ここで問題にしたい「自体的」は「実体」に適用されるそれである。その説明によれば、付帯的にあるもの(付帯的な属性)²⁰はこれとは別のものとしての基体(実体)について言われるのに対して、実体はこれとは別のものとしての基体について言われない「自体的にあるもの」である²¹。もちろんここには第一の実体と第二の実体との区別はない。付帯的にあるものの例として「歩いているもの」と「白いもの」が挙げられていることから、実体の例としては「人間」などを考えることができる。白いものは白い人間のよう人間であることによって白いと言われるのであって、そのような「白いもの」は自体的にあるものではなく付帯的にあるものとみなされる。これに対して、人間は別のものが付加されることによって人間と言われるのではない。したがって人間は自体的にあるものとみなされる。「白いもの」といった表現は必ずしもいわゆる付帯的複合体を示すわけで

¹⁹ Bostock (1994), pp. 86-87 は『形而上学』Z巻第4章の注釈において、「事物が本質的な述語づけにおいてそれであると言われるところのそれ」が本質であると考え、君の本質は君に固有のものではなく、私の本質と同じものであると説明している。しかしアリストテレスは君の例で、「自体的に」を「君自体で (κατὰ σαυτόν)」と表現している (b15-16)。君が君という個物自体でそれであると言われるところのそれが君の本質であり、そのような本質としては、君に固有のものを考えることもできる。天野 (1993), p. 21 は、ここでの「自体的に」は「それ自身の故に」とか「それ自身の本質によって」という意味ではないとして、この自体的な述語づけによって、「ソクラテス=(ソクラテスの本質としての) 人間」ということが意味されていると説明している。Z巻第4-6章における本質論については拙著 (2015) の第3章において詳しく論じている。

²⁰ ここでの「付帯的にあるもの」は、基体について言われるという意味では、付帯的な属性のことであると考えられるが、「歩いているもの」や「白いもの」が何らかの基体を前提にして歩いているものであり白いものであると説明されることからすれば、付帯的な複合体を指しているとも考えられる。この曖昧さは『形而上学』Z巻第6章の一節 (1031b22-28) でアリストテレス自身によって説明されている。

²¹ テキストは以下のとおりである。「或る他のものとしての〈基にある〉ものについて言われないものが〔自体的にあるものである〕。例えば歩いているものは、或る別のものであることによって歩いているものであり、白いものは〔或る別のものであることによって〕白いものである (τὸ βαδίζον ἕτερόν τι ὃν βαδίζον ἐστὶ καὶ τὸ λευκὸν <λευκόν>)。しかし実体、すなわち或るこれを示す限りものは、或る別のものであることによって、それがまさにそれであるところのもの (ὅπερ ἐστὶν) であるのではない。こうして私は、〔或る他のものとしての〕〈基にある〉ものについて〔言われ〕ないものを自体的にあるもの (καθ' αὐτά) と言い、〔或る他のものとしての〕〈基にある〉ものについて〔言われる〕ものを付帯的なものと言う」(An. Post. I 4, 73b5-10)。

はなく、むしろここでは白いという属性に主眼が置かれており、「白いもの」などは付帯的属性とみなされることになる。ともかく、人間といった実体は何も付加されることなくそれ自体で人間であり、その意味で自体的にあるものである。この箇所では、カテゴリーの一つとしての実体が問題にされているようにも見える。つまり、或る特定の人間は人間であると言われる場合の、述語の位置にある人間について、それはそれ自体で人間であると言われているように見える。このように理解するとしても、人間であると言われるところの基体としての或る特定の人間は前提になっていると考えられる。しかし『カテゴリー論』の場合とは異なり、主語の位置にあるものと述語の位置にあるものとを区別することは意図されていない。いずれにせよ、『分析論後書』の当該の箇所では個物が問題にされているのかがはっきりしない。この点を明確にするのが『形而上学』Z巻第4-6章の論述である。

アリストテレスは『形而上学』Z巻第6章において、それぞれのものとその本質との同一性を主張する。「それぞれのもの」には、個別的な実体、種、形相、アイデアをあてはめることができる²²。ここでの個別的な実体は、質料形相論によって理解される結合体ではないことに注意する必要がある²³。ともかく、Z巻第4章冒頭において、本質は、「それぞれのものが自体的にそれであると言われるところのそれ (*ὁ λέγεται καθ' αὐτό*)」(*Met. Z 4, 1029b14*)と説明されている。自体的にそれであると言えない例として、君が教養あるものであるということが言われている。これが付帯的な述語づけであることは明らかであるが、付帯的な述語づけと区別される自体的な述語づけによって本質は示されるということである。

自体的な述語づけの具体例は挙げられていないが、Δ巻第18章に述べられている内容から、君は自体的に人間であるという例を考えてよいだろう。この箇所ではアリストテレスは、「カリアスは自体的に (*καθ' αὐτόν*) カリアスであり、カリアスの本質 (*τὸ τί ἦν εἶναι Καλλία*) である」(*Met. Δ 18, 1022a26-27*)と述べている。この用法の後の用法として、定義の一部を述語の部分に示す例、例えば「カリアスは動物である」という例が挙げられている。この用法の例としては、「カリアスは二足である」、あるいは種としての人間を述語づけて、「カリアスは人間である」と言ってもよいだろう。この用法は、本質的な述語づけを意味する自体的な述語づけであると考えられる。しかしその前の用法における、「カリアスは自体的にカリアスである」という例は、カリアスとは別のものを示すつもりがないことを表している。しかしこれは単なる同語反復ではない。述語の位置の「カリア

²² 千葉 (2002), pp. 194-196 は、Z巻第6章の、ロギコースに語られる論述において、「自体的にあり、第一である限りのもの」(1031b13-14)としての「それぞれのもの」がどのようなものとして理解されるべきかは問題にされていないとしているが、実質的には質料なしの形相をそのようなものと考えているようである。

²³ Z巻第4-6章における論述は質料形相論の観点なしのものである。坂下 (1998), p. 61 は、これらの章で取り上げられる、白い人間のような付帯的存在を「質料抜き白い人間」と説明している。

ス」はすぐにカリアスの本質と言い換えられている。カリアスの本質としては、最下種の名を用いて表すのがよいと考えられるので、実質的にこの例は、「カリアスは自体的に人間である」となるだろう。ただし、先ほど見たもう一つの用法、すなわち、種としての人間を述語づける用法とは異なることに注意しなければならない。Z巻第4章における自体的な述語づけを、カリアスそれ自体をカリアスの本質によって示すΔ巻第18章の用法と同じものと理解することによって、「君は自体的に人間である」における「人間」は君の本質を指し、かつ、この本質の名によって、君を人間に分類するのではなく君そのものを示すということが行われていることが理解されるだろう。この自体的な述語づけにおいて、君と君の本質とは同じものであることが示されている。「人間」という種の名が本質を表すのに用いられ、君そのものを示すのに用いられている。ここで問題にされている君はそのまま丸ごと、もともと人間なのである。このような自体的な述語づけによる個別的な実体の理解は、第一の実体が種の名を用いて捉えられていたことを説明するものだと言ってよいだろう。こうして、「第一の実体」の含蓄が自体的な述語づけによって説明されるということが理解されるだろう。

おわりに

以上から明らかになることは、やはり『カテゴリー論』における形而上学的思考は練られたものではなく、これから練られることになる発想が示された著作であるということである²⁴。テキストの理解において発展史的方法を採用するわけではないが、『カテゴリー論』における形而上学的思考はかなり早い段階のものと言わざるをえないように思われる。その思考のうち、属性に対する実体の優位性は、他の著作において、非対称性に基づく存在論的な優位性という洗練された形で提示されることになる。このことから翻って『カテゴリー論』における実体と属性の関係を見るなら、『カテゴリー論』のうちにも、明確に語られてはいないが、属性に対する実体の存在論的な優位性を読み込むことも不可能ではないだろう²⁵。そのような読み込みに加えて、『形而上学』Λ巻前半のウーシア一論に見られる、属性に対する実体の原因性への言及 (*Met.* Λ 5, 1070b36–1071a2) を想起することによって、アリストテレスは『カテゴリー論』においてすでに実体の原因性を念頭に置いていたと主張することもできるだろう。しかし『形而上学』Λ巻前半の論述が『自然学』の論述を相当に踏まえたものであることを考えると、そのような主張は難しいかもしれない。とはいえ、『カテゴリー論』のうちには『自然学』における生成変化の学説に通じる

²⁴ 松永訳の解説でも、『カテゴリー論』は「アリストテレスの哲学形成の最初期における立場の叙述」であり、「この『範疇論』に述べられた彼の思想は、それにつづくさまざまな著作において、徐々に修正されている面が多い」(p. 168)と説明されている。

²⁵ しかし本稿では2において示したように、この存在論的な優位性を『カテゴリー論』に読み込まないという選択を行った。

内容が含まれていることも事実であり、アリストテレスが『カテゴリー論』において実体の原因性をまったく考えていなかったとすることにもためらいが感じられる。『カテゴリー論』と後の諸著作との関係について考察するには、本稿では取り上げていない非実体に関するテキストの緻密な読解も必要である。これについては今後の課題としたい。

文献一覧

- Ackrill, J. L., *Aristotle's Categories and De Interpretatione, Translated with Notes and Glossary*, Oxford: Clarendon Press, 1963.
- 天野正幸「アリストテレスのウーシア一論（I）」、東京大学文学部哲学研究室『論集』11号、1993年、pp. 1–38.
- Bostock, D., *Aristotle, Metaphysics Books Z and H, Translated with a Commentary*, Oxford: Clarendon Press, 1994.
- 千葉恵『アリストテレスと形而上学の可能性——弁証術と自然哲学の相補的展開』、勁草書房、2002年。
- Corkum, P., 'Aristotle on Ontological Dependence', *Phronesis* 53, 2008, pp. 65–92.
- Fine, G., 'Separation', *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 2, 1984, pp. 31–87.
- Frede, M., 'Titel, Einheit und Echtheit der Aristotelischen Kategorienschrift', in P. Moraux und J. Wiesner (eds.), *Zweifelhaftes im Corpus Aristotelicum: Studien zu einigen Dubia*, Berlin: Walter de Gruyter, 1983, pp. 1–29.
- Furth, M., *Substance, Form and Psyche: An Aristotelean Metaphysics*, Cambridge: Cambridge University Press, 1988.
- Höffe, O., *Aristoteles*, München: C. H. Beck, 1996.
- 今井知正「実体の問題」（講演原稿）、カントアーベント、哲学会、2011年。
- 井上忠『モイラ言語——アリストテレスを超えて』、東京大学出版会、1988年。
- 岩田圭一『アリストテレスの存在論——〈実体〉とは何か』、早稲田大学出版部、2015年。
- 加藤信朗『ギリシア哲学史』、東京大学出版会、1996年。
- Lewis, F. A., *Substance and Predication in Aristotle*, Cambridge: Cambridge University Press, 1991.
- Loux, M. J., *Primary Ousia: An Essay on Aristotle's Metaphysics Z and H*, Ithaca: Cornell University Press, 1991.
- 松永雄二訳『カテゴリーアイ』、田中美知太郎編「世界古典文学全集 16 アリストテレス」、筑摩書房、1966年。
- Menn, S., 'Metaphysics, Dialectic and the Categories', *Revue de Métaphysique et de Morale* 3, 1995, pp. 311–337.

- 中畑正志訳『カテゴリー論』、「アリストテレス全集 1」、岩波書店、2013 年。
- 納富信留『ギリシア哲学史』、筑摩書房、2021 年。
- 荻野弘之訳『エウデモス倫理学』、「アリストテレス全集 16」、岩波書店、2016 年。
- Peramatzis, M., *Priority in Aristotle's Metaphysics*, Oxford: Oxford University Press, 2011.
- 坂下浩司「「自体的存在」としてのカテゴリー——『形而上学』Δ 卷第 7 章における存在への視点——」、日本西洋古典学会『西洋古典学研究』46 号、1998 年、pp. 56–66.
- 高橋久一郎「個体と形相」、千葉大学文学部『人文研究』20 号、1991 年、pp. 1–25.
- 訳『分析論後書』、「アリストテレス全集 2」、岩波書店、2014 年。
- 内山勝利訳『自然学』、「アリストテレス全集 4」、岩波書店、2017 年。
- Ushida, N., “Before the *Topics*? Isaak Husik and Aristotle's *Categories* Revisited”, *Ancient Philosophy* 23, 2003, pp. 113–134.
- 渡辺邦夫『アリストテレス哲学における人間理解の研究』、東海大学出版会、2012 年。
- Wedin, M. V., *Aristotle's Theory of Substance: The Categories and Metaphysics Zeta*, Oxford: Oxford University Press, 2000.
- 山口義久訳『トポス論』、「アリストテレス全集 3」、岩波書店、2014 年。
- 山本巍「問題としての実体——アリストテレス実体論の見取図——」、『理想』516号、1976年、pp. 2–26.
- 「根拠と言葉の途——井上忠の哲学——」、哲学会『哲学雑誌』131巻、803号、2016年、pp. 8–33.

後記

本稿は第 25 回共同研究セミナーにおける発表原稿に加筆、修正を行ったものである。司会を務めていただいた岩田直也氏、質問やコメントをくださった方々、ご参加いただいた皆様にお礼申し上げたい。加筆、修正のうち、大きなものは、『カテゴリー論』第 5 章 3a1–6 の訳出の不備の修正と、「おわりに」の後半部分の修正である。また、字数を少なくするために文章の削除や修正を行った。以下、ご質問やご意見を簡潔に紹介しながら若干のコメントを述べさせていただく。

納富信留氏には、発表原稿の最後の部分で触れた、『カテゴリー論』に「原因」の概念を読み取ろうとする試みについて問題を指摘していただき、ピュシコースとロギコースという二つの探究方法についてコメントをいただいた。この区別の重要性は発表者も認めるところであり、問題の箇所を修正を行った。

今井知正氏には、属性（付帯的属性）と内属性との区別についてご質問いただき、内属性の基体は『カテゴリー論』第 2 章にあるとおりに魂とソーマである点に注意を向ける必要があることをご指摘いただいた。内属性に関する今井先生のご論文をあらためて読ませて

いただき、内属性の問題について理解を深めることにしたい。

中畑正志氏には、ヒュポケイメノン最初から個物として理解することは問題であり、ヒュポケイメノンは問題になっているものを取り出す装置であるということをご指摘いただいた。ウーシアーについても、何であるかという問いとの関係で理解されるものであって、ウーシアーとはまさにそれであるところのものであるというご意見をいただいた。どちらもご指摘のとおりと思うが、発表者は発表原稿において、それらの概念を伝統的な仕方でも表しつつ、ご指摘の意味合いについては付加的に説明を行うのがよいと判断した。ウーシアーの訳語については検討の余地があり、中畑先生のご翻訳や注釈をあらためて確認しながら、他の諸著作との関係も考えつつ検討を重ねていきたい。

山本巍氏には、発表者が『カテゴリー論』における個物を種的に何であるかがわからないようなものではないと説明したことに対して、他の論理的著作においてはそのようなもの（個体変項、正体不明の X）が認められているということをご教示いただき、さらに、井上哲学的な個体の把握の問題についてコメントをいただいた。山本先生のご論文を再度拝読するとともに井上忠先生の諸論考にあたって、個物のあり方、捉え方の問題について理解を深めることにしたい。

荻原理氏には、存在論的な優位性の問題を考える際に前提となる非対称性の問題についてご質問をいただいた。その場では注3の説明を敷衍する形で回答した。この問題について十分に説明するには、個体属性の問題についての明確な理解も必要であり、これについても研究を進めることにしたい。

山口義久氏には、カテゴリーの列挙においてウーシアーが示される際、『形而上学』Z巻第1章や『トポス論』では「何であるか」が用いられるが、『カテゴリー論』の場合はウーシアーだけであるという事実について、アリストテレスがその後の論述（第5章）で基体性について説明しようとしていたからではないかということをご指摘いただいた。発表原稿の趣旨をご理解いただいた上でのご指摘で、大変有益であった。また、『カテゴリー論』における個物は種を構成するものとしてアトモンであるということもご指摘いただいた。このご指摘も踏まえて、今後、「数的に一つのもの」という表現の意味について考察し、個物について理解を深めることにしたい。

最後になったが、後日メールでコメントをお寄せいただいた方々にも感謝申し上げます。

（本研究は JSPS 科研費 22K00043 の助成を受けたものである。）